

# 小学生の国語誤用の収集・分析と指導法開発に関する研究(1)<sup>†</sup>

成田 雅樹\*

秋田大学教育文化学部

この論文は小学生の言葉の使い間違いを収集し、分析した結果を述べるものである。収集した間違いは158事例であった。分析は学年ごと、間違いが表れている言語単位ごと、間違いの種類ごと、原因の推定ごとに行った。顕著に言えることは概ね以下の通りである。

言語単位では、「音・文字」に表れる間違いが最多であり、特に「長音」に関するものが多い。この「音・文字」に表れた間違いの種類は、ほとんどが「欠落」と「錯誤・不使用・不足」である。しかも「錯誤・不使用・不足」は、誤りの種類のなかで最多であった。

原因推定では、「意識希薄」が最多であり、「音・文字」や「語」で「口語表現」になっている誤りが過半数を占めている。この場合の誤りの種類も、すべて「錯誤・不使用・不足」であった。

学年別に見ると、すべての学年で「聞き違い」や「不注意」による「音・文字」の誤りが多かった。

**キーワード：**小学生、国語、作文、誤用、原因、指導法

## 1. はじめに

### 1. 論文の概要と研究の目的

本論文は、平成28年度～30年度に科学研究費補助金研究として行う「小学生の国語誤用の収集・分析と指導法開発に関する研究」課題番号(16K04654)の一貫として、平成28年度に取り組んだ研究の結果をまとめたものである。

本研究の目的は、小学生の思考力・判断力・表現力の基礎を育てるために、言葉の誤り(「国語誤用」)を収集・分類して原因を推定し、有効な予防・改善策を策定することである。本研究には、先立つ研究として筆者が行った「小学校の学年別・文種別指導文型の設定と指導方法の開発」(平成25年度～27年度基盤研究(C)課題番号25381160)がある。この研究では、小学生の文章資料(1年生、4年生、5年生、

6年生の日記)から指導文型の抽出を行ったのだが、その際、多数の「国語誤用」が見つかり、本研究の必要性が明らかになった。

### 2. 「国語誤用」とはなにか

「国語誤用」とは、母語教育としての日本語教育である国語教育において見られる学習者の言葉の誤りのことである。外国人の日本語学習者に見られる様々な言葉の誤りを、国語学・日本語学では「日本語誤用」と言うが、本研究は国語教育における小学生の誤用を研究対象とするため、「国語誤用(あるいは単に「誤用」)」と称することにする。

小学生の談話や文章には、教師の予想を越える言葉の誤りが現れることがある。送り仮名の誤り、濁点忘れ、句読点の誤用、仮名遣いの誤り、促音・拗音・長音の誤り、敬体と常体の混用、助数詞の誤り、言葉を聞き違えて覚えている場合(発音や表記)や、文字の書き間違い(誤字、脱字等)など、いわゆる言語事項に関する単純なものは、誤りを指摘し正しいものを示すことで概ね改善できる場合もあり、学

2016年12月28日受理

<sup>†</sup>How to teach Japanese essay writing to Japanese elementary school students: Through an analysis of errors in students' essays

\*Masaki NARITA, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

年が上がるにつれて減少する。一方、接続詞の誤用や文末時制の誤用など、文法に関わる誤用は少数ながら高学年にも出現しており、改めがたい傾向が伺える。このような、児童の認識に起因すると思われる文法の誤りなどは、教師には予想外であることが多く、原因推定や改善指導がむずかしい場合もある。

例えば、「昨日の晩御飯は、すごくおいしかったです。」などの誤用がある。これは、時制は文末で表現するという思いこみによる形容詞の活用の誤り（「おいしかった」とすべき）、あるいは「でした」は名詞や、動詞＋「の」に続くという規則が理解できていないことによる誤りと考えられるが、児童に理解できるように説明することはむずかしい。もちろん、「すごくおいしかったです。」と直すだけでは、その時限りの訂正にとどまる可能性が高い。

### 3. 研究と成果活用の計画

本研究で扱う国語誤用は、容易に収集できるという理由から、文章資料に見られる「書くこと」に関するものとする。また原因が複雑で改善が困難な文法上の誤りを中心としつつも、広く収集する。

研究初年度の平成28年度には、収集した国語誤用を類別した上で、学年ごとの出現傾向や原因推定を行った。ただ、先述の通り、収集対象とした日記資料（1990年4月～2003年3月に書かれた東京都立小学校のグループ回覧日記）が、小学1・4・5・6年生のものしかなかったため、2年生の資料は文集資料（「ぶんしゅう ねりまの子ら 2年」№44 練馬区小学校教育会国語研究部編 平成9年3月25日）に頼らざるを得なかった。文集は教師の添削の手が入っているため、収集できた誤用はごくわずかであった。また、3年生の資料は未収集であるが、筆者が平成28年度に卒業研究を指導した学生の中に、小学校3年生の国語誤用の研究に取り組んだ者がおり、このデータを次年度に補って全学年のデータを整える計画である。

平成29年度以降は、この類別、学年傾向、原因推定に基づいて、誤用の予防や改善のための指導法の開発を行う。指導法の開発には、誤用例の教材化、学習評価指標への活用を含むこととする。具体的には、筆者の過去の論文（「作文評価法改善の試み NAEPの有効性の検討と利用方策の考察」全国大学国語教育学会編『国語科教育』第71集、平成24年3月31日所収）において提示したスケールサンプル（作

文のA・B・C3段階の到達度評価や、到達度に応じた指導に必要となる「段階ごとの不十分さ」が残る児童生徒作文の典型例）の「段階ごとの不十分さ」の開発に、本研究で収集しようとしている「国語誤用」を活用するということである。我が国では、よく書けた作文は教科書教材や作文コンクール入選作文集などで目にするができるが、不十分な児童生徒作文の保管・収集はほとんど行われていない。国語誤用の収集は、こうした状況において遅れているスケールサンプルの開発に役立つ。スケールサンプルを評価尺度として用いるだけでなく、不十分な箇所を改める教材として利用することは、「書くこと」教育における「指導と評価の一体化」に大きく貢献するものと考えられる。

### 4. 先行研究の状況と本研究の必要性

ところで、言葉の誤りに関する研究・実践の蓄積としては、『日本語誤用分析』1997年明治書院企画編集部編やその続編、市川保子編著『日本語誤用辞典』2010年スリーエーネットワークなど、先述の「日本語誤用」に関する研究とこれをふまえた日本語教育の実践があり、あえて本研究を行う必要はないと考える人もいるだろう。しかし、外国人の「日本語誤用」には、母語である外国語の影響が見られたり、成人の認識が原因となっていたりして、日本語を母語とする児童に見られる「国語誤用」とは、その種類や頻度、原因が異なる面がある。やはり、小学生の国語誤用に関する研究が必要なのである。

では、日本人の国語誤用に関する先行研究や先行実践はないのだろうか。永野賢著『悪文の自己診断と治療の実際』1969年至天堂や岩淵悦太郎編著『悪文』1960年日本評論社など国語学の研究成果はある。しかし、国語表現の「正誤」というよりも「適否」を問題にしている研究である。成人を対象としている点でも、小学生の「国語誤用」と一致しない。

それでは、日本人の小学生の国語誤用に関する研究はないのか。わずかながら存在する。国語教育・国語科教育においては、「つまずき指導」や「診断指導法」などの研究と実践が見られる。しかし、これも十分ではない。例えば、教育診断研究会著『国語学習の診断と治療』1942年新光閣、平井昌夫著『国語学習の診断と治療』1957年明治図書、阪本一郎・安藤新太郎・村石昭三編『国語科の治療的指導』（低中高）1957年学芸図書、奥水実編著『国語学力診断

指導法体系』(小中の学年別)1966年明治図書などは、昭和20年代の「学習指導と評価」の研究の発展と考えられるが、誤用の事例そのもの(サンプル)ではなく、誤用の説明にとどまっている。さらにその後には発表された「つまずきの治療」あるいは「つまずきの指導」をキーワードとする研究・実践においても十分ではない。例えば興水実編『国語科学習のつまずき事例研究 国語科3・4年のつまずき例と指導』(他に1・2年, 5・6年)1973年明治図書や、木川達爾・神保信一編『授業におけるつまずきの診断と指導 国語』1974年第一法規、高津忠行監修・大阪市小学校国語教育研究会著『文章表現のつまずきの分析と治療指導』1986年明治図書などがこれにあたる。これらにおける「つまずき」は、「書くことが見つけられない」、「ふくらませて書くことができない」、「中心がぼやけている」など、いわゆる基本的指導事項についての「つまずき」であり、「治療」や「指導」が、誤用の予防や改善策と言うよりは、通常の学習指導になっている。また管見によると、以上の研究・実践の他に文部省が出した初等教育研究資料がある。これは各領域のつまずきとその指導を内容とするものである(例えば『第XII集 読解のつまずきとその指導(1)』、『第XVIII集 読解のつまずきとその指導(2)』など)。これらは先述のものより具体的な誤用例が豊富に挙げられているが、いわゆる診断テストの結果であり、誤用例が誤答選択肢の選択例にすぎないために、誤用例が調査者側で設定した選択肢の範囲に限られている。

また、言語事項指導として提案された、林進治著『言語要素とりたて指導入門』1971年明治図書や、その続編である学年別の『言語要素とりたて指導細案』などの詳細な指導法でさえ、具体的な誤用例が述べられていない。

このように、従来の「国語誤用」に関する研究や指導は決して十分ではなく、近年のデータがふまえられているわけでもない。本研究は、表現の「豊かさ」や「確かさ」の前提となる「正しさ」を養い、誤った表現を生じさせている児童の認識(思考・判断の前提でありかつ結果である)を正す指導方法を提案しようとするものであり、小学生を対象として「書くこと」に関する文法上の誤用を主とする「国語誤用」の具体事例(サンプル)を体系的に収集するという点で、過去に例を見ない有益な研究成果が期待できると考えている。

## II. 「国語誤用」の分類と原因考察

### 1. 収集の状況

単純で明らかな誤用、誤用とまでは言えない可能性のある事例など広く収集したが、漢字については深入りをさけた。漢字の読み・書きの誤答類別については、筆者がかつて参加した全国規模の調査研究(『教育漢字の読み・書きの習得に関する調査と研究 第3回調査2003年実施』2005年1月27日 財団法人総合初等教育研究所)及び『教育漢字の読み・書きの習得に関する調査と研究 第4回調査2013年実施』2014年11月20日 一般財団法人総合初等教育研究所)で、類別が膨大になることが分かっていたからである。

また、今回は類別ごとに出現頻度が明らかになるような重複収集は行っていない。作業が著しく遅延して、研究期間内に予定した成果が出せない可能性があるからである。

今回収集したデータは複数の類別が可能な一部事例が重複しているが、総数158であった。このデータを分析する際の観点は、誤用が発生している箇所の(1)「言語単位およびその下位分類」、(2)「誤りの種類」、(3)「原因推定」、(4)「出現学年」である。なお、本論文に掲載する収集データは、「学年」→「言語単位およびその下位分類」→「誤りの種類」→「原因推定」の順に整理した表である。

以下、この4つの観点それぞれを中心にしてデータを整理した場合の考察結果を述べる。

### 2. 観点ごとの考察

#### (1) 言語単位及びその下位分類

言語単位は、「0:記号・符号レベル」,「1:音・文字レベル」,「2:助詞・助動詞レベル」,「3:語(文の成分)レベル」,「4:文レベル」,「5:その他(口語表現)」に分類し、下位分類は、0レベルが句読点や濁点、1レベルが長音・促音・撥音・拗音などや、ひらがな・片仮名・漢字、2レベルが助詞・助動詞・副詞・接続詞など、3レベルが主語・述語など、4レベルが構文、文型に関わる文の中の係り受けや照応関係などとし、5の口語表現は、0~4の言語単位に分類した。

出現数の多い順に考察する。最多は48事例の1レベル(30.4%)である。特徴的なのは、長音に関するものが17事例あったことである。しかも、誤りの種類では「欠落」と「錯誤」がほとんどである。学

年は1年生に多いが、4・5年生にも見られる。原因は、高学年の場合や「欠落」の場合は「不注意」と思われるが、低学年と同様に「聞き違い」や、仮名遣いの「理解不足」が改善されていないことも考えられる。この1レベルの、他の下位分類では、促音・拗音・撥音の「欠落」や「錯誤」、類音・同音の「錯誤」、片仮名・漢字の「不使用」、ひらがなの字形の「錯誤」、送りがなの「重複」や「錯誤」などが見られるが少数である。

次は29事例の4レベル(18.4%)である。文の成分どうしの位置関係に関するものが22事例で最多であった。主語述語が照応していない、語の位置が悪いために係り受けの関係が曖昧になっているなど、いわゆる位置や構成に関するものであり、「重複」や「欠落」や「付加」ではない。思考の整理に関わる問題であり、改善しにくい誤用と考えられる。基本文型による単文ではなく、複雑で長い複文や重文に出現しやすい誤用であり、学年もほとんどが4・5・6年生である。他に、少数ながら注目する必要がある誤用として、「授益(やり)受益(もらい)の錯誤」や「文末述語の時制錯誤」が挙げられる。誰が誰に何をしてあげるのか、発話時点と発話内容の時点はいつか、などを区別して「です」や「でした」を用いたり、述語動詞や述語形容詞の活用形に注意したりする必要がある。

3番目は28事例の5レベル(17.7%)である。これは、書き言葉にすべきところを口語表現にしまっている誤りであり、これが見られる言語単位は、「1:音・文字レベル」と「3:語(文の成分)レベル」が半々である。誤りの種類は音(文字)の「省略」や置き換えによる「錯誤」が半々である。学年は4・5・6年に多く、書き言葉に対する「意識希薄」が原因と考えられる。

4番目は23事例の3レベル(14.6%)である。誤りの種類に特徴があり、ほとんどが「重複」である。重複の対象となるのは、文の成分である主語や述語、修飾部の副詞などである。4・5・6年生に多く見られ、原因としてはすでに述べたことの「変化・忘却」や、強調の「意識過剰」が考えられる。防ぐには、読み直しながら書き進める必要がある。

5番目は21事例の2レベル(13.3%)である。助詞に関する誤りが半数以上で、誤りの種類は他の助詞との「錯誤」がほとんどである。この中で特徴的なのは、発音と表記が異なる「は・を・へ」の誤用

がすべて1年生のものであることである。低学年段階で重点的に指導すべき言語事項と言うことになる。他には、「～たり～たり」や「～とか～とか」といった並列の表現における繰り返しのルールが守られていない事例がある。当然のことながら誤りの種類は繰り返すべき助詞・助動詞の「不足」となる。原因は、繰り返しルールの「理解不足」と考えられる。最も少なかったのは9事例の0レベル(5.7%)である。半数以上が、句読点に関するもので、誤りの種類は「欠落」が多い。学年はすべてにわたるが、低学年の原因は、「聞き違い」や「取り違い」などのインプットに関わるものと考えられる。一方高学年は、「不注意」などアウトプット段階のものと考えられる。

## (2) 誤りの種類

誤りの種類は、「1:重複」、「2:欠落」、「3:付加・冗長」、「4:錯誤・不使用・不足」、「5:不照応」、「6:濫用」の6類別にした。

出現数が最多なのは、94事例の4:錯誤・不使用・不足(59.5%)である。対象となる言語単位は、「1:音・文字レベル」が27事例、「5:その他」の中の「1:音・文字レベル」が15事例、合計42事例で半数弱に上る。この種類の誤用は「1:音・文字レベル」に現れやすいということになる。「1:音・文字レベル」の内訳は、長音8事例、類音5事例、片仮名4事例、漢字4事例、同音2事例、促音1事例、字形類似のひらがな1事例、送りがな1事例、文字順序の錯誤1事例である。「5:その他」の内訳は、文字一般の錯誤が9事例、類音が3事例、撥音が2事例、長音が1事例である。次に多いのが「2:助詞・助動詞レベル」で19事例である。内訳は、「は・を・へ」の助詞とこれ以外の「に」「を」「と」「の」などの助詞が12事例、並列の助詞・助動詞が6事例、助数詞が1事例である。その次が「4:文レベル」で、14事例である。このうち、文の成分の関係の錯誤が9事例で、これはさらに、位置や語順の錯誤5事例と授益と受益の逆転2事例、順接と逆接の逆転2事例に分かれている。文の成分の関係の錯誤以外の5事例は、文末時制の錯誤2事例、文末の敬体・常体の錯誤2事例、インフォメーションギャップによる説明不足1事例を含んでいる。

次は、24事例の2:欠落(15.2%)である。この中で最多は「1:音・文字レベル」15事例である。



内訳は、長音に関するもの6事例、促音に関するもの5事例、拗音に関するもの2事例、撥音に関するもの1事例、送りがなに関するもの1事例である。次に多いのは、「0:記号・符号レベル」6事例である。内訳は句点3事例、読点1事例、濁点2事例である。残りは「3:語(文の成分)レベル」3事例である。内訳は主語が2事例、述語が1事例である。

3番目は、21事例の1:重複(13.3%)である。この種類の誤用では、「3:語(文の成分)レベル」が最多で16事例である。内訳は、副詞や接続詞などの重複が8事例、述語の重複が4事例、主語の重複が3事例、目的語の重複が1事例である。次に多いのは、「1:音・文字レベル」で4事例、その次が「2:助詞・助動詞レベル」1事例である。

4番目は、9事例の5:不照応(5.7%)である。これはすべてが「4:文レベル」で内訳もすべてが「文の成分の関係」である。

5番目は、7事例の3:付加・冗長(4.4%)である。この種類の誤りには「1:音・文字レベル」2事例、「2:助詞・助動詞レベル」1事例、「3:語(文の成分)レベル」1事例、「4:文レベル」3事例が含まれ、言語単位との相関関係は判断できない。

最後は、3事例のみの6:濫用(1.9%)である。該当する言語単位は「4:文レベル」で下位分類は「文の成分の関係」である。具体的には、順接の接続詞「そして」をむやみに使う誤用である。

以上が(2)誤りの種類を中心にした考察であるが、誤りの種類ごとの該当言語単位に関する原因推定や学年傾向は、(1)でも述べたため省略した。

### (3) 原因推定

原因推定は、主として言語知識のインプット段階の原因として、「1:聞き違い」、「2:取り違い」、「3:語彙不足」、「4:理解不足」の4つ、主として言語知識を使って表現するアウトプット段階の原因として、「5:不注意」、「6:意識不足」、「7:意識希薄」、「8:意識過剰」、「9:無自覚」、「10:混乱」、「11:変化・忘却」の7つ、合計11の原因に分けた。

もっとも多かった原因は、47事例の「7:意識希薄」(29.7%)であった。内訳は、「5:その他(口語表現)」が28事例で過半数を占めている。書き言葉と話し言葉との区別の意識希薄が原因で、口語による慣用表現が現れやすいという相関関係が読み取れる。この「5:その他(口語表現)」が表れる言語単位は、「1:音・

文字レベル」と「3:語(文の成分)レベル」がほぼ半々である。なお、誤りの種類はすべて「4:錯誤・不正・不足」である。また、学年傾向はなく、すべての学年に見られるが、強いて言えば、音の省略(「やらかく」など)は低学年に多い。「7:意識希薄」の中で次に多かったのは、言語単位「4:文レベル」11事例である。これはすべて文の成分の関係に現れた誤用で、誤りの種類は「4:錯誤・不使用・不足」が7事例、「5:不照応」が4事例である。次に多かった言語単位は、「1:音・文字レベル」3事例である。その次は「2:助詞・助動詞レベル」の2事例と、「3:語(文の成分)レベル」の2事例である。最も少なかったのは「0:記号・符号レベル」の1事例である。

2番目に多かった原因は、32事例の「4:理解不足」(20.3%)である。対象となる言語単位の内訳は、「1:音・文字レベル」が15事例、「2:助詞・助動詞レベル」が11事例、「4:文レベル」5事例、「3:語(文の成分)レベル」が1事例である。誤りの種類は、上記のほぼすべての言語単位で「4:錯誤・不使用・不足」である。

3番目に多かった原因は、28事例の「5:不注意」(17.7%)である。対象となる言語単位は、過半数の16事例が「1:音・文字レベル」であり、このうち10事例の誤りの種類が「2:欠落」である。書く際の不注意によって、文字の欠落が起こりやすいということである。他の言語単位では、「0:記号・符号レベル」が5事例、「2:助詞・助動詞レベル」が3事例、「3:語(文の成分)レベル」が3事例、「4:文レベル」が1事例である。

4番目に多かった原因は、14事例の「1:聞き違い」(8.9%)と、同じく14事例の「11:変化・忘却」(8.9%)である。「1:聞き違い」の対象となる言語単位は、濁音と半濁音の錯誤(はっば→はっば)1事例で、これ以外のすべてが「1:音・文字レベル」である。これらの誤りの種類は「4:錯誤・不使用・不足」が過半数である。聞き違いは音や文字の錯誤として現れやすいと言うことである。同じく14事例であった「11:変化・忘却」の対象となる言語単位は、「3:語(文の成分)レベル」が7事例、「4:文レベル」が4事例、「2:助詞・助動詞レベル」が3事例である。これらの誤りの種類で最多は「1:重複」の5事例である。書いているうちに書こうとしていること(想)やすすでに書いたことを忘れると、品詞や単語以上の言語単位に重複が生じやすいと言える。

5番目に多かった原因は、8事例の「8:意識過剰」(5.1%)である。対象となる言語単位は、不要な冗長表現の1事例を除く7事例すべてが「3:語(文の成分)レベル」である。誤りの種類も7事例すべてで「1:重複」である。しっかり説明したい、強調したいといった意識が過剰だと、文の中で単語・熟語が繰り返し書かれ、重複してしまうことが多いと言える。

6番目に多かった原因は、6事例の「10:混乱」(3.8%)である。「やりもらい関係(授益と受益)」の表現や文末時制に関わる「4:文レベル」の誤用が多い。

残りの原因は、3事例(1.9%)ずつの「2:取り違い」,「3:語彙不足」,「9:無自覚」である。取り違いには記号・符号が多く、無自覚には「そして」の濫用が目立つ。

#### (4) 出現学年

##### ① 1年生

全体で47事例(29.7%)あり、言語単位では「1:音・文字レベル」の誤用が17事例でもっとも多い。さらにこの中では長音に関するものが7事例と多く、17事例全体では「1:聞き違い」5事例や「5:不注意」7事例が多い。次に多い言語単位は、「2:助詞・助動詞レベル」7事例である。このうち4事例の助詞「は・を・へ」表記の錯誤は1年生特有の誤用である。次に多い「4:文レベル」7事例については、特段の特徴は見られない。「5:その他(口語表現)」6事例は、書き言葉と話し言葉の区別の意識希薄による、音・文字レベルの誤用が多いと言える。次に多い「0:記号・符号レベル」5事例は、全学年でも数の少ない言語単位にもかかわらず、4・5・6年生には1例ずつしかなく、ほとんどが1年生に集中している。低学年では句点が欠落しやすい。最後の「3:語(文の成分)レベル」5事例は、他の学年とほぼ同数で、「11:変化・忘却」が主な原因と考えられる。

##### ② 2年生

先に述べたが、誤用収集の対象とした日記資料に2・3年生のものがいないため、2年生については東京都練馬区の文集から収集した。文集は教師の手が入っており、ほとんど誤用がない。そのため、全体で6事例しかない。この学年の誤用は、次年度以降に補わなければならない。少なすぎて特徴や傾向

を言うことはできないのだが、強いて言うなら、誤りの種類として「1:重複」が多い。

##### ③ 3年生

筆者は、平成28年度の卒業研究で国語誤用の研究に取り組んだ学生を指導した。この学生は、県内の公立小学校の3年生学級でデータ収集や2時間の検証授業をしている。今年度はこのまとめが間に合わないため、次年度に取り入れることにする。

##### ④ 4年生

全体で54事例(34.2%)であり、言語単位では「1:音・文字レベル」12事例が最多であるが、他の言語単位と差がなく、4年生には多様な言語単位に関わる誤用がまんべんなく現れている。この「1:音・文字レベル」の内訳としては、長音に関するものが4事例で、比較的多い。誤りの種類は「2:欠落」と「4:錯誤・不使用・不足」が多く、それらの原因としては「4:理解不足」や「5:不注意」が多い。次に多い言語単位は「3:語(文の成分)レベル」11事例と「5:その他(口語表現)レベル」11事例である。「3:語(文の成分)レベル」については、誤りの種類として「1:重複」が多く、原因としては「11:変化・忘却」や「5:不注意」の他、「8:意識過剰」が見られる。11事例で同数の「5:その他(口語表現)レベル」は、下位分類が「1:音・文字レベル」と「3:語(文の成分)レベル」でほぼ半々になっている。両方とも特定の音や品詞ではなく、全般的に誤用が見られる。この原因は「7:意識希薄」である。指導の際には、書き言葉をしっかり意識させ、文字や単語・熟語を書く際の誤用を防がなければならない。次に多かった「2:助詞・助動詞レベル」10事例については、「は・が・の・を・に・と」等の助詞の錯誤や並列表現で繰り返すべき「～とか～たり」の不足が多く見られる。原因から考えると、表現のルールをしっかりと指導して理解させ、書いている最中に読み直ししながら進めることで、忘却を防ぐように助言することが大切である。次に多かった言語単位「4:文レベル」9事例は、文の中の語順や、文の成分どうしの照応についての意識が希薄であることが主な原因であるため、意識的に読み直ししながら書き進めることを指導しなければならない。最後の言語単位「0:記号・符号レベル」1事例は、わずかながら各学年に見られる。

##### ⑤ 5年生

全体で33事例(20.9%)である。最も多く見られ

る言語単位「1:音・文字レベル」13事例は、長音に関する欠落や錯誤が多い。原因に見られる「1:聞き違い」や「4:理解不足」を早期に発見したり、「5:不注意」を防ぐための方略（たとえば音読による読み直し）を助言したりする必要がある。次に多い言語単位の「5:その他（口語表現）レベル」8事例は、「1:音・文字レベル」や「3:語（文の成分）レベル」に多く現れている。原因が「7:意識希薄」であることをふまえて、書き言葉として適切かどうか常に注意しながら書くことを指導しなければならない。次に多い「4:文レベル」7事例は、文の成分どうしの関係の誤りがほとんどである。原因は、「4:理解不足」や「11:変化・忘却」など多様である。学習者個々の誤用傾向を把握した上での指導が求められる。残りの「3:語（文の成分）レベル」3事例、「0:記号・符号レベル」1事例、「2:助詞・助動詞レベル」1事例については、データが少なすぎるため省略する。

#### ⑥ 6年生

全体で18事例（11.4%）である。最多の言語単位である「1:音・文字レベル」6事例については、「1:聞き違い」や「4:理解不足」、「5:不注意」による文字表記の誤りが多いということが言える。次の「4:文レベル」4事例については、他の学年と同様で、文の中の係り受けや語と語の照応に意識を向けながら書くように指導しなければならない。残りの「5:その他（口語表現）レベル」3事例、「0:記号・符号レベル」2事例、「2:助詞・助動詞レベル」2事例、「3:語（文の成分）レベル」1事例については、他の学年と同様のため省略する。

### Ⅲ. おわりに

今回の(1)～(4)の考察は、収集した158のデータ個々について、出現学年・言語単位・誤りの種類・誤りの原因の4側面から判断し、(1)～(4)ごとにエクセルで並べ替えたデータに拠っている。個々の類別判断については、何度も精査しているが、複数の類別判断が可能なため、重複して拾い上げている事例がある。これによって考察の妥当性を欠くわけではないが、個々のデータの(1)～(4)の判断は、

引き続き検討しなければならない課題である。

次年度以降は、誤用の予防策としての取り立て指導や、対処策としての推敲指導の方法を研究していく。その際、学部生の卒業研究における小学3年生の誤用収集データと指導法検証のための授業実践の分析を反映させるつもりである。

### Summary

With an aim to develop the appropriate method for teaching Japanese essay writing to Japanese elementary school students, in this paper the author analyses errors found in their essays. A total of 158 errors were collected and they were classified according to the students' grades, the unit of language, types of errors and possible causing factors. The results of the examination showed that, in all grades, errors related to the "sounds and letters" appeared frequently, caused by mishearing and lack of attention. In addition, from the viewpoint of unit of language, errors were found most frequently in the "sounds and letters," especially prolonged sounds. Furthermore, of the errors related to "sounds and letters," most fell in the categories of "missing" and "mistake, nonuse and shortage," the latter of which was most frequent.

As for possible causing factors, low awareness was the most frequent factor, and more than half of the errors were related to the students' use of colloquial expressions in the units of "sounds and letters" and "words," in which all the errors fell in the category of "misapprehension, nonuse and shortage." (179 words)

**Key Words** : elementary school students,  
Japanese language,  
composition/essay writing,  
error, factor, teaching method

(Received December 28, 2016)

通番	(1) 言語単位	(1) 下位分類	誤用名称	(2) 誤りの種類	誤用例	修正案	(3) 原因推定	(3) 番号	(4) 出現学年
1	0	1	読点と「の」の錯誤	4	おかあさんがいなかったのでおもたちのうちにいったら」	」を、に	符号・記号の取り換え	2	1
2	0	2	句点の欠落	2	(事例略)		不注意	5	1
3	0	2	句点と読点の錯誤	4	(各行末に「、」を打つ)		文末と行末の取り換え	2	1
4	0	3	濁点の欠落	2	とちゆうて	とちゆうて	不注意	5	1
5	0	3	清音と半濁音の錯誤	2	きれいなほつば	きれいなほつば	聞き違い	1	1
6	1	101	長音の欠落	4	ビーケー	ビーケー	不注意	5	1
7	1	101	長音の欠落	2	サッカー	サッカー	不注意	5	1
8	1	101	長音の欠落	2	どうおはあさんですか。	どうおは	不注意	5	1
9	1	101	不要な「長音」の付加	2	さいしよは	さいしよ(最初)	聞き違い	1	1
10	1	101	長音仮名遣いの錯誤	4	おねえちゃん	おねえさん(お姉さん)	聞き違い	1	1
11	1	101	長音仮名遣いの錯誤	4	ほくとわたなべくんのとりでした。	とより	仮名遣いの理解不足	4	1
12	1	101	長音仮名遣いの錯誤	4	～とゆう～	～という	書き言葉意識(発音と表記の区別)希薄	7	1
13	1	102	促音の欠落	2	はつばようかいなのでいしよけんめい	いしよけんめい	不注意	5	1
14	1	102	促音の欠落	2	あそぼうて、わたしがいました。	あそぼうて	不注意	5	1
15	1	103	撥音の欠落	2	しゆくわい	しゆくわい	聞き違い	1	1
16	1	105	文字(音)の錯誤	4	しゆくわい	しゆくわい(種別)	聞き違い	1	1
17	1	105	文字(音)の錯誤	4	おかあさんほこ	おかあさんほこ	聞き違い	1	1
18	1	108	片仮名の不使用	4	スーパーマリオ	スーパーマリオ	片仮名の理解不足	4	1
19	1	108	片仮名の錯誤	4	(事例省略)		カタカナの字形の理解不足	4	1
20	1	109	漢字表記の錯誤	4	二土とび	二重	同音漢字の取り換え	2	1
21	1	111	文字の重複(語幹の送り仮名化)	1	4んたい2	4んたい2	不注意	5	1
22	1	111	文字の重複	1	なっていたから	なっていたから	不注意	5	1
23	2	201	不要な理由・原因の接続助詞「ので」の付加	3	ぼくは、今日、夜、歌番組がやっていたので、ぼくの好きな歌を取っている人がいました。	今日、夜、歌番組がやっていたので、ぼくの好きな歌を取っている人がいました。	書き出し時点の「想」が途中から変化し、原因・結果の係り受けが消えた	11	1
24	2	201	助詞「て」の錯誤	4	ピアノで3月6日にはつばようかいがあります。	では、3月6日にピアノの～	手段・場所等「で」の機能の理解不足	4	1
25	2	201	助詞「は・を・へ」表記の錯誤	4	けんかであまりません	では	仮名遣いの理解不足	4	1
26	2	201	助詞「は・を・へ」表記の錯誤	4	おはり	おわり	仮名遣いの理解不足	4	1
27	2	201	助詞「は・を・へ」表記の錯誤	4	けきおやります	けきをやります	仮名遣いの理解不足	4	1
28	2	201	助詞「は・を・へ」表記の錯誤	4	はなこさんのかえがありました。	かお	仮名遣いの理解不足	4	1
29	2	221	並列の助動詞(～たり)の不足	4	かみをゆつたりきものをきました。	きたりしました。	並列の繰り返しルール理解不足	4	1
30	3	301	主語の重複	1	きょう、やぎさんとかたおかさんが「ファミコンであそぼう」とかたおかさんがいきました。	(重複部分削除)	記述内容の忘却	11	1
31	3	301	主語の重複	1	ぼくが、今、大人ではにんだらぼくはたいほされることでした。	(重複部分削除)	記述内容の忘却	11	1
32	3	301	不要主語の付加	3	ぼくは、今日、夜、歌番組がやっていたので、ぼくの好きな歌を取っている人がいました。	今日、夜、歌番組がやっていたので、ぼくの好きな歌を取っている人がいました。	書き出し時点の「想」が途中から変化し、変化した「想」を受け取る述語になっている	11	1
33	3	306	助数詞と名詞の重複	1	私は、14日の日に、七五三をしました。	14日に	不注意	5	1
34	3	306	意味の重複	1	妹のおもだちといしよに遊んであげました。	おもだちと遊んであげました。	行為の主客が混乱	10	1
35	4	401	語順の錯誤	4	もつおきたら〇時でした	おきたらもう	係り受け・呼応・照応の表現意識希薄	7	1
36	4	401	主述の不照応	5	チームきめは、ぼくとわたなべくんとおりました。	チームきめは、ぼくとわたなべくんでやりました。	係り受け・呼応・照応の表現意識希薄	7	1
37	4	401	係り受けの不照応(理由・接続助詞)	5	ぼくは、今日、夜、歌番組がやっていたので、ぼくの好きな歌を取っている人がいました。	今日、夜、歌番組がやっていたので、ぼくの好きな歌を取っている人がいました。	想の変化・忘却	11	1
38	4	401	順接の接続詞(そして)の濫用	6	わたしはきょううえんにいきました。そしてはじめてにぶらんこをしました。そしてつぎにてつぼうをしました。そして好きなさんはかえりました。	最後の「そして」だけでよい	濫用に無自覚	9	1
39	4	402	不要な冗長表現	3	まよ、おてあそびのつづきのあそび	あそび(明日)	語順の混乱	10	1
40	4	402	説明不足	4	まあくんのいえにあそびにいきました。	まあくんのせつめい	インフォーマーションギャップ	7	1
41	4	403	文末添語の時制錯誤	4	とてましたのでした。	たのしかたです	出来事時点と発話時点の混乱	10	1
42	5	101	口語慣用表現(長音)による錯誤	4	～とゆう～	～という	書き言葉意識希薄	7	1
43	5	104	口語慣用表現(撥音)による錯誤	4	とまらなくなった	とまらなくなった	書き言葉意識希薄	7	1
44	5	104	「のだ」文末の口語慣用表現「んだ」による錯誤	4	とっていったんです	とっていったのです	書き言葉意識希薄	7	1
45	5	111	口語慣用表現(省略)による錯誤	4	やらかく	やらかく	書き言葉意識希薄	7	1
46	5	111	口語慣用表現(省略)による錯誤	4	ぼくはたいほされることでした。	とこと	書き言葉意識希薄	7	1
47	5	306	「のせる」の口語慣用表現「のつける」による錯誤	4	スポンジをおいて、ぼくがきたいちごをのつけて、その上にまらしたスポンジをせました。		書き言葉意識希薄	7	1
48	2	221	並列の助動詞(～たり)の不足	4	家でもいっばいおどつたりして、おかあさんに「じょうずだね。」といっばい言われました。	削除か「〇〇したり」を付加	並列の繰り返しルール理解不足	4	2
49	3	302	述語の重複	1	わたしは小人のせと、お手紙を讀むせとしました。	一方を削除	説明意識過剰	8	2
50	3	302	述語の重複	1	さいしよ、しま村くんがお手紙をとって、「」と言って紙をとるこことなつてたんだけど～	一方を削除	文が長くなったために既述を忘れている	11	2
51	3	306	程度副詞の重複	1	家でもいっばいおどつたりして、おかあさんに「じょうずだね。」といっばい言われました。	(おどる か 言われる 一方に絞る)	強調したいという意識が過剰	8	2
52	4	401	程度副詞の位置の錯誤	4	とつてもおどりがいききててよかったよ。	いきいきか「よかった」の前	係り受け・呼応・照応の表現意識希薄	7	2
53	4	402	不要な冗長表現	3	(自宅でのことを書いているので「わたしの」は不要なのに、「わたしのおねえちゃん」)	おねえちゃん	説明意識過剰	8	2
54	0	2	句点の欠落	2	ひるやすみとかは一輪車をやります()	()に。	不注意	5	4
55	1	101	長音の重複	1	イトーヨーカドー	イトーヨーカドー	不注意	5	4
56	1	101	長音の欠落	2	おかあさん	おかあさん	不注意	5	4
57	1	101	長音仮名遣いの錯誤	4	おねえさん	おねえさん(お姉さん)	聞き違い	1	4
58	1	101	長音仮名遣いの錯誤	4	ぼくのお	ぼくのお	仮名遣いの理解不足	4	4
59	1	102	促音の欠落	2	ちやつた	ちやつた	不注意(前の促音は書いてい)	5	4
60	1	102	促音の欠落	2	べつショップを服にいしよしました。	いしよつた	不注意	5	4
61	1	103	撥音の欠落	2	じゆまよう	じゆまよう	聞き違い	1	4
62	1	106	仮名遣い「ず」と「づ」の錯誤	4	かたづけ	かたづけ	仮名遣いの理解不足	4	4
63	1	108	片仮名の不使用	4	とらぶら	トラブル	片仮名表記すべき語の理解不足	4	4



64	1	110	類似字形の仮名の錯誤	4	およげよ	およげよ(泳げるよ)	ひらがな字形の理解不足	4	4
65	1	111	送り仮名の錯誤	4	先生来るの早あいな	早い	理解不足	4	4
66	1	111	文字順序の錯誤	4	ドーナツゲーム	ドーナツゲーム	不注意	5	4
67	2	201	原因・理由の接続助詞「から」の重複	1	あとすいどうのこうしもしてたからみずもまてたからでぜんぶふんでした。	あとすいどうのこうしもしてて	原因意識の混乱	10	4
68	2	201	助詞「に」と「を」の錯誤	4	今日、学校でーりん車走りました。	に	不注意	5	4
69	2	201	「は」が「が」の錯誤	4	ゆうちやんは今年来るときは、元気に来てほしいです。	が	主語・主題・主部の区別意識希薄	7	4
70	2	201	助詞「に」と「と」の錯誤	4	家くんよけて、じゅんくんよけてきました。	に	説明意識が希薄	7	4
71	2	201	助詞「に」と「が」の錯誤	4	三浦知良さんがクロアチアの先発が決まりました。	三浦知良さんの・先発に	文脈を主語として書き始めたことを忘れている	11	4
72	2	201	助詞「を」と「の」の錯誤	4	エーデルワイスの曲を作りたいと思いました。	エーデルワイスを・エーデルワイスの曲を	被修飾語(曲)の書き落とし	11	4
73	2	221	並列の助詞(～とか)の不足	4	かぎとかにさしこむところ	かぎとか〇〇とか	並列の繰り返しルール理解不足	4	4
74	2	221	並列の助詞(～たり)の不足	4	ペトショップを見にいったりしました。	いったり〇〇したり	並列の繰り返しルール理解不足	4	4
75	2	221	並列の助詞(～たり)の不足	4	かみの毛をのばしたり、いろいろオシャレしているのに、みんなからこわがられています。	オシャレしたりしているのに	並列の繰り返しルール理解不足	4	4
76	2	241	助数詞の錯誤	4	ビデオを借りました。2倍借りました。	2本・2巻	語彙不足	3	4
77	3	301	主語の重複	1	クッキーは、食べなかったけど、クッキーの中までこんがやけていました。	下線部削除	不注意	5	4
78	3	301	主語の欠落	2	今日晩ご飯を食べていたら～したじきやくれました。	〇〇がしたじきをくれました。	インフォメーションギャップ(相手意識が希薄)	7	4
79	3	302	述語の重複	1	児童館に行って～をのりに行きました。	行ってから～をのりに〇〇に行きました。	既述の述語忘却	11	4
80	3	302	述語の重複	1	駅の前にあるぼうがあつて、～	駅の前にぼうがあつて、～	既述の述語忘却	11	4
81	3	302	述語の欠落	2	ママはじゅんがバットをもっているうしろに(じゅんがうでなかつたボールをとるやくだして)	( )に、「いて」等を補う	文末へ後回しにしたまま忘れている	11	4
82	3	304	目的語の重複	1	きょう舎人公園に(い)とママとわたしのピクニック(い)に行きました。	(重複部分削除)	説明意識過剰	8	4
83	3	305	対義語の錯誤	4	(買い物金額が)お姉ちゃんより私の方が低かったです。	安かった・少なかった	語彙不足	3	4
84	3	306	逆説の接続詞と接続助詞の重複	1	でもためはわかったけど	一方を削除	不注意	5	4
85	3	306	意味の重複	1	新聞に妹のなかが載ったことがあったので、そなたのなかの写真が～	その写真・なかの写真	説明意識の過剰	8	4
86	3	306	程度副詞の重複	1	とつてもおいしくできてとつてもうれしかった	(おい)さかうれしきか一方に絞る	強調したいという意識が過剰	8	4
87	3	306	程度副詞の重複	1	今日、ぼくは、かえりに、ちよっと、いつもどおり(お)りでは、なくてちよっと、おそくなりました。	(いつもどおりでないかおそくなったか一方に絞る)	説明意識過剰	8	4
88	4	401	文の成分の位置(語順)の錯誤	4	私はつい最近までテレビに出ていたのでびっくりしました。	私はびっくりしました。	係り受け・呼応・照応の表現意識希薄	7	4
89	4	401	文の成分の位置(語順)の錯誤	4	車が駅の前に棒があつて、それを壊したため太い棒になりました。	車がそれを壊したため	係り受け・呼応・照応の表現意識希薄	7	4
90	4	401	接続詞「それで」の理由表現・経時表現の錯誤	4	ゲームで勝つてとてもうれしかった。それで、サッカーをやつて引き分けだった。	その後で	より適切な表現を求める意識が希薄	7	4
91	4	401	授益(やり)受益(もらい)の錯誤	4	いとうさんが「これ、かしてあげる。つかつて。」と、自由をゆかしてくれました。	かしてくれました。	行為の主体が混乱	10	4
92	4	401	係り受けの非照応(理由・接続詞)	5	なぜかと言うとちよつとわかりません。	なぜなのかは	理由の文型の理解不足	4	4
93	4	401	陳述の副詞の不照応	5	きょうは、あんまりのしいと思いましたが。	思いませんでした。	係り受け・呼応・照応の表現意識希薄	7	4
94	4	401	主述の不照応	5	ぼくが、サッカーの練習を、いばんな楽しみにしているのがサッカーの練習じいあがいます。	練習じいあです。	係り受け・呼応・照応の表現意識希薄	7	4
95	4	401	順接の接続詞(そして)の濫用	6	(例文省略)		濫用に無自覚	9	4
96	4	403	文末述語の時制錯誤	4	ちよつと、やりかたがちががなりました。	ちがいました・ちがったので	動詞の活用形の理解不足	4	4
97	5	105	口語慣用表現(おーい)による錯誤	4	点数がわるくもいもくも	よくても	書き言葉意識希薄	7	4
98	5	111	口語慣用表現(省略)による錯誤	4	ちよつと、テレビの横に(きんぎょ)があつたので	みた	書き言葉意識希薄	7	4
99	5	111	口語慣用表現(「～のうち」)の省略(「～ち」)による錯誤	4	かおりちゃんち	かおりちゃんのうち	書き言葉意識希薄	7	4
100	5	111	逆接の接続詞「けれど」の口語簡略表現「けど」による錯誤	4	たすかつてよかったけど、	けれど	書き言葉意識希薄	7	4
101	5	111	順接の接続詞「すると」「それから」の口語簡略表現「したら」による錯誤	4	(例文省略)		書き言葉意識希薄	7	4
102	5	306	「し」の口語慣用表現(「やう」)による錯誤	4	車がつつこんじやった事ので、わたしは5人も死なせなかつたんで～	つつこんでしまった。死なせてしまった	書き言葉意識希薄	7	4
103	5	306	理由・原因の接続詞「ので」の口語慣用表現「から」による錯誤	4	～だけだったから		書き言葉意識希薄	7	4
104	5	306	口語慣用表現(接続詞「あと」)による錯誤	4	あと、ユダヤ人が公共しせつが便なかつたというのかわいそうだなあと思いました。	それと、また、そのほかに	書き言葉意識希薄	7	4
105	5	306	解説の「～か」「～なの」による錯誤	4	どんなにたいへんか分かりました。	たいへんか、たいへんなのか、たいへんだったか	書き言葉意識希薄	7	4
106	5	306	省略(無意識的換喩)による錯誤	4	きょうびアジがありました。	ピアノの練習(習い事)	正しい表現に対する意識希薄	7	4
107	5	306	省略(無意識的換喩)による錯誤	4	ハバは洋服の仕事をします。	ハバの仕事は洋服をつくることです。	正しい表現に対する意識希薄	7	4
108	0	3	濁点の欠落	2	なきそうになつてくれよ	けれど	不注意	5	5
109	1	101	長音の欠落	2	ポトボール	ポート	不注意	5	5
110	1	101	長音の欠落	2	どうしてやめたかつてゆと	ゆうと-いうと(言う)と	不注意	5	5
111	1	101	不要音(長音)の付加	3	さいしように	さいしよに(最初)に	聞き違い	1	5
112	1	101	長音表記の錯誤	4	「はやく」とゆわれました	いわれました	聞き違い	1	5
113	1	101	長音表記(仮名遣い)の錯誤	4	まちどおしい	まちどおしい(待ち遠しい)	聞き違い	1	5
114	1	101	長音表記(長音記号)の錯誤	4	あめくいきようそー	きょうそう	表記ルールの理解不足	4	5
115	1	104	撥音の欠落	2	ころばないであそんでた	あそんでいた	不注意	5	5
116	1	105	類音表記(仮名遣い)の錯誤	4	しやい	しあいに(結合)	聞き違い	1	5
117	1	106	表記・同音表記(仮名遣い)の錯誤	4	あつした	あつした	仮名遣いの理解不足	4	5
118	1	108	片仮名の不使用	4	わたしのくらすに	クラス	片仮名表記すべき語の理解不足	4	5
119	1	109	漢数字の表記の錯誤	4	1人おともだちが…	一人	縦書き・熟字訓表記の理解不足	4	5
120	1	111	形容詞の活用語尾の重複	1	とおいな	とおい(遠い)	聞き違い	1	5
121	1	111	送り仮名の欠落	2	ピースを買ました	買いました	漢字の語幹の理解不足	4	5
122	2	221	並列の助詞(～たり)の不足	4	新藤さんはめいつけたりするのをやってくれました。	めいつけたり〇〇したりするの～	並列の繰り返しルール理解不足	4	5
123	3	301	主語の欠落	2	～キーをかつてたべました。それからプレゼントに～してん車をかつてくれました。	〇〇がしてん車をかつてくれました。	インフォメーションギャップ(相手意識が希薄)	7	5

124	3	306	程度副詞の重複	1	～すごくおもしろいかなんかではないです。 でも今はすごく人気で秋ごろにならないと手に入 りません。	(おもしろそう か 人気か 一方に絞る)	強調したいという意味が過剰	8	5
125	3	306	使役と可能の錯誤	4	あたらしい自転車をのらせてもらいました。	のせて	動詞の使役表現の理解不足	4	5
126	4	401	逆接と順接の錯誤	4	きょうは、わたしのたんじょう日でした。でも今日 ケーキをかって食べました。	だから	不注意	5	5
127	4	401	授受(やり)受益(もらい)の錯誤	4	～ケーキをかって食べました。それからプレゼント にじてん車をかってくれました。	〇〇がじてん車をかってく れました。	行為の主体が混乱	10	5
128	4	401	係り受けの不照応	5	どうしてかって言うとお母さんに言われてやめま した。	～言われたからです。	理由の文型の理解不足	4	5
129	4	401	主述の不照応	5	今日わたしはプールがあります。	プールの習い事にいきます。	主語意識・主述照応意識希薄	7	5
130	4	401	主述の不照応	5	その子は～タラという子で( )といっていました。	～(名前)は( )といっていました。	主語の脱落・忘却	11	5
131	4	401	主述の不照応	5	大貫良二というのは、～全編読んだ人が勝ちで ～おもしろい。	～(名前)は( )といっていました。 勝ちになるゲームです。	長文のために主語を忘却	11	5
132	4	404	敬体と常体の錯誤	4	～おもしろい。	～おもしろい。	文体統一の理解不足	4	5
133	5	105	話し言葉の使用・敬音表記(仮名遣い)による錯誤	4	どうしてやめたかってゆと	ゆとという(言う)と	書き言葉意識希薄	7	5
134	5	105	話し言葉の使用による錯誤	4	「はやく」とゆわれました	いわれました	書き言葉意識希薄	7	5
135	5	111	話し言葉の使用による錯誤	4	たなかさんち	たなかさんのうち(家)	書き言葉意識希薄	7	5
136	5	111	比較の表現「～の方が」の口語簡略表現「～の方が」による錯誤	4	今日、国・算のテストで、国語のがとくいなのに、 ～	～の方が	書き言葉意識希薄	7	5
137	5	306	「[しま]の口語慣用表現「ちやう」による錯誤	4	～具がたくさんあまっちゃって、全部入れちやいました。	あまってしまったので、入れて しまいました	書き言葉意識希薄	7	5
138	5	306	理由・原因の接続詞「ので」の口語慣用表現「から」による錯誤	4	お母さんが「おくりないうから、学校のところ まで行きました。		書き言葉意識希薄	7	5
139	5	306	逆接の敬体接続詞「ですが」の口語常体接続詞「けど」による錯誤	4	(～ました。～ました。の文に続けて)私はそこで 本を買おうと思ったんだけど～	おもったのですが、	書き言葉意識希薄	7	5
140	5	306	抽象名詞「もの」の口語慣用表現「やつ」による錯誤	4	でも、いのこりてやつたやつは、かんたんでしたよ。	もの	書き言葉意識希薄	7	5
141	0	2	句点の欠落	2	～きまってもせんぜなら～	ません。	不注意	5	6
142	0	2	読点の欠落	2	そして大乱闘スマッシュブラザーズをやって( )コン ピュータと戦って( )すとうくんとかぼくが勝ちました。	( )に、	出来事や行動や事柄の区切り 意識希薄	7	6
143	1	102	促音の欠落	2	おかあさんほこ	おかあさんごっこ	聞き違い	1	
144	1	102	促音の位置の錯誤	4	ずーと	ずうと	不注意	5	6
145	1	105	文字(音)の錯誤	4	ぜんいんがひなんしてきました。	ぜんいん(全員)	聞き違い	1	6
146	1	105	類音語との錯誤	4	そこにはきゆうきゆう車が行って、	居て	不注意	5	6
147	1	109	漢字表記(意味を当てる漢字使用)の錯誤	4	えのもとくん室(えのもとくんち)	ち、の家	漢字の読みの理解不足	4	6
148	1	109	漢字の不使用	4	ザンシ	雑談	漢字の理解不足	4	6
149	2	201	目的地「に」と活動場所「で」の錯誤	4	今日は〇〇駅にあそびました。	あそびに行きました。	不注意	5	6
150	2	201	目的地「に」と活動場所「で」の錯誤	4	船つきばにソウアザラシが車をこわしてしまつた。	船つきばで	不注意	5	6
151	3	306	恣意的な省略表現による錯誤	4	～かなりあるのでへらし中です。	へらししている最中	語彙不足	3	6
152	4	401	不要な逆接接続詞の付加	3	昨日はお父さんの誕生日だった。でもお父さんは 1時間かかるところで仕事をしている。	(削除)	想の変化・忘却	11	6
153	4	401	語順の錯誤	4	ちよつとたかこがうの8まいとるはずだったのに いっぱいちよつとつたからたいへんで	ちよつとたいへんで	係り受け・呼応・照応の表現意 識希薄	7	6
154	4	401	順接の接続詞(そして)の濫用	6	(例文省略)		濫用に無自覚	9	6
155	4	404	敬体と常体の錯誤	4	～たのしかったです。～やりなおしました。	(どちらかに統一)	文末文体統一・ルールの理解不 足	4	6
156	5	111	口語慣用表現による錯誤	4	えのもとくん室(えのもとくんち)	ち、の家	書き言葉の意識が希薄	7	6
157	5	306	口語慣用表現(場所を表す指示語に「くち」への)の濫用による錯誤	4	一番しらへんにくと～	のあたり	書き言葉意識希薄	7	6
158	5	306	「食べる」の口語慣用表現「食う」による錯誤	4	マック(ドナルドのハンガー)を食った。	食べた	書き言葉意識希薄	7	6